

県史編纂班の方々、広瀬誠・近岡七四郎・米原寛・関清氏等、富山県立図書館・新湊市文化財審議会・富山県の教育関係者などのメンバーに、県外より和算など科学・技術史関係を担当された藪内清・吉田光邦・吉田柳二氏等の協力者が加わり、各分類毎の解説を付した目録が完成されたのである。周到で、よく整った内容を見ると、限られた期間のなかで、調査員各位がいかに御苦労されたが行間にはしみ出ている。その成果は、当代の定評ある目録と比較しても些も遜色のない出来栄えといひ得よう。関係者の御苦労に心からなる敬意を表するとともに、これが緒口となつて石黒氏歴代の業績が総合的に解明されることを期待したい。近年刊行されたすぐれた目録のひとつといえるであらう。

申込先 富山県新湊市本町二一〇一三
 ○ 新湊市役所 社会教育課
 代金 本代四、五〇〇円+送料(代金は、同目録及び請求書を受け取った後、送金すること)

(B5判 五二二頁 一九七九年三月)
 富山県教育委員会
 (船越昭生 奈良女子大学文学部教授)

R. A. Dodgshon and
 R. A. Butlin (eds.):
 An Historical Geography
 of England and Wales

歴史地理学者は、もはや過去の空間的パターンの再構築にのみ関心を示すのではなく、そのようなパターンを生み出すプロセスに関心をもつべきであるという動きは、一九六〇年代以後、イギリス歴史地理学界において、しだいに大きなものとなつてきた。そして、この考え方にしたがって、過去に関する諸問題も再評価がなされている。こうした成果をイングランドとウェールズの歴史地理としてまとめたのが本書である。イギリス歴史地理学におけるこの変化は、各時代のクロスセクションとそれらの間の変化を共通の視点とする、一九七三年のH. C. Darby (eds.): *A New Historical Geography of England* と本書におけるテーマ別の視点を比べれば、明らかであろう。本文は十四章からなり、一章を(一)内示した一人の執筆者が担当している。なお、前半では一応、時代別に一章をなすが、一五〇〇年以降を対象とし、この本の3分

の2を占める後半はテーマ別の構成をとる。第一章(B. K. Roberts)では先史時代の研究に関して、資料の問題から、年代測定法、文化の連続性の問題がとり上げられ、さらに、遺跡に関する空間分析、仮説検証について展望がなされる。

第二章(T. Hodder)は、晩期鉄器時代社会の空間構造とそれらがローマ時代ブリテン社会に与えた影響、ローマタウンや村落パターン、道路ネットワークなどの分析を試みる。

第三章(G. R. J. Jones)では、ローマ時代とノルマンの征服との間の時代が扱われ、イングランド諸王国の発生、社会組織、農村や都市の変貌・発展などが論じられている。

第四章(R. A. Dodgshon)では、*Domesday Book* の分析から、人口分布や社会類型が描き出され、2つの発展モデルを軸として、社会や町、工業について考察が加えられる。

第五章(R. A. Butlin)には、十四世紀後半から十五世紀にかけての人口や経済、都市や村落また商工業などの分析から、イングランド東部・東南部の発展を描き出す。

第六章 (J. A. Yelling) からテーマ別の構成となり、第六～八章が一五〇〇年から一七三〇年を、第八章以降が一七三〇年から一九〇〇年をさまざまなテーマにもとづき、とり上げる。

まず、第六章では農業について、その構造や組織を、エンクロージャーや土地所有の面から考え、また、市場との関係、生産技術、土地利用の変化に対する障害の三つの要素から、この時期の農業生産の増大を論じる。

第七章 (J. Langton) は、地域経済が統合され国家経済として発展していくという考えのもとに、毛織物工業、石炭工業、農村工業と都市工業などの発展プロセス、都市機能などについて考察がすすめられる。

第八章 (R. M. Smith) においては、この時期の総人口の構造把握を試みており、人口移動についても検討しつつ、人口変動における空間パターンを論じる。

第九章 (J. R. Walton) では、一七三〇年以後の農業における変化を、農業革命、農業変化のパターン、変化のメカニズムという順序で分析する。

第十章 (E. Pawson) は、この間の工業

発展を扱い、その特徴とともに、その原因として需要の増加や供給面での諸因子をあげ、最後に工業発展のパターンを把握しようとする。

第十一章 (D. Gregory) も、同じくこの時期の工業における変化過程を扱い、労働過程の地域的変質にみられる三つの段階を論じている。

第十二章 (R. Lawson) は、人口と社会をとりあげ、人口傾向、人口成長の空間パターンを都市・農村社会間の関係や、都市の成長についても考察しつつ分析する。

第十三章 (H. Carter) では、前半で十八世紀前半における都市システムとその後の変化を検討し、そのメカニズムの解明を試みる。後半では、都市の発展に伴う機能地域分化を論じている。

第十四章 (A. Moses) は、前半では、ターンパイク、運河、鉄道などによって時期区分し、各時期の交通ネットワークにおける構造的特質を論じる。後半は、交通と空間経済の形態変化との関係について述べられ、最終的には、交通の発達を説明するモデルが求められる。

このように、不完全なものもあるとはい

え本書所収の論文の多くは、なんらかの理論の検証あるいはモデル構築を念頭におき、事実の記述ではなく解釈を強調し、より厳格で探究的と思われる方法をとうとうとしている。これは、単なる事実やパターンを通してというより、むしろさまざまな理論や解釈を通して過去の理解を深めようとするものである。

最後にここ十年余のイギリス歴史地理学における方法・内容両面での重要な変化を織りこんだ本書は、学生のための基本的文献として生まれたものではある。しかしながら、地理学のみならず、社会経済史をはじめ隣接諸科学においても、本書は興味深いものではないかと思われる。

(四五〇頁 一九七八年 London, Academic Press)
(藤井 正 京都大学大学院生)